1960年代末の若者文化

── フーテン（族）とヒッピー（族）についての覚書 ──

市　川　孝　一

はじめに

これまで3回にわたって戦後の若者文化の流れを追ってきた（市川，2012，2013，2014）が，本稿はその第4弾である。今回は，フーテン（族）とヒッピー（族）を中心に1960年代末の若者文化の一端を検証対象とする[1]。これまでの論考と同様，なるべく当時の新聞記事や雑誌記事の一次資料に立ち返って，彼らが当時どのようにとらえられ，どのように語られていたかを再検証していきたい。それらの作業を通じて，フーテン（族）とヒッピー（族）の特徴とそれらにあらわれた当時の若者文化の特質，その基礎や背景にある社会的状況や若者の心理および時代の社会心理のあり様をさぐっていきたい。

この時期の若者文化といえば，何よりも全国で吹き荒れた学生運動こそ最大の“若者にまつわる社会現象”と言える。しかし，これはあまりにも大き過ぎるテーマであり，簡単には扱えない。このテーマは別の機会に改めて取り上げることにして，本稿では，最低限ふれるだけにとどめる。

フーテンとは

フーテンとは言うまでもなく「瘋癲」のカタカナ表記である。それでは，「瘋癲」とは何か。辞典では次のように説明されている。── ①精神状態が正常でないこと。また，そういう人。②定まった仕事も持たず，ぶらぶらしている人（『広辞苑』第6版，2008年）。

ちなみに，フーテンが話題になっていた時点での『広辞苑』（初版，1954年，第2版，1969年）の「瘋癲」の説明は凄まじい。── 後天的精神病の中

で，言語錯乱・意識混濁・感情爆発の著しいものの俗称。きちがい。精神病。癲狂。「一病院」。

なお，第3版（1983年）・第4版（1991年）では「精神状態が正常でないこと。また，そういう人。癲狂。――という簡単な記述になり，第5版（1998年）から上記の第6版と同様の記述となる。

一つの言葉の説明にこだわり過ぎたが，その意味の変遷が興味深い。後者②の意味については，ある世代以上の日本人だったらすぐに，映画「男はつらいよ」の主人公で渥美清が演じた車寅次郎の通称「フーテンの寅」を思い浮かべるだろう。この作品は，もともとは1968～69年にかけてフジテレビのテレビドラマとして放映された。ところが，人気が高かったにもかかわらず，主人公がハブにかまれて死ぬという唐突な終わり方をしたため，視聴者からの抗議が殺到したこともあり，改めて1969年に松竹で同じ主人公の映画がつくられた。それがシリーズ化され，結果的には48作（特別編も入れると49作）という一大国民映画になったのである。

本稿で扱う「フーテン（族）」が登場したのが，1967年と言われているので，時間の前後関係から言うとドラマや映画の「男はつらいよ」より，フーテン族の方が先行している。「男はつらいよ」の主人公「フーテンの寅」というキャラクターが，逆に「フーテン（族）」からヒントを得たものだという説を立ててもいいかもしれない。

もちろん，「フーテン」ということばを広く知らしめるのに貢献したのは，元祖「フーテン（族）」よりも，圧倒的に寅さん＝「フーテンの寅」の方であることは言うまでもない。なお，寅さんの名誉のために付け加えるなら，寅さんには「テキ屋」という立派な生業がある[2]。

また，「瘋癲」という言葉との関連で言えば，谷崎潤一郎の有名な作品の一つに「瘋癲老人日記」（1961年）という小説がある。ここでの「瘋癲」は言うまでもなく①の意味であるが，「異常」とか「変態」と言ってしまうと，身も蓋もない。この作品は，「鍵」（1956年）と並んで，“老人の性”がテーマの作品だというとらえ方がされることも多い。この題材自体が，俗受けしやすいテーマなので，両作品とも映画化やドラマ化されている[3]。

フーテン族とは

フーテン族は例えば次のように説明されている。――「1967（昭和42）年夏，

東京・新宿に出現した異様な風体の若者たちのこと。定職を持たず，ぼうぼうの髪と汚れ放題のシャツにジーンズ，ゴム草履という姿で日が暮れるとどこからともなくあらわれ，新宿駅東口のグリーンハウスと称する芝生にたむろし，通行人をぼんやり眺めたり，小金をせびったり，奇声を発したりした。当時グリーンハウスを定宿としたフーテンの数は約800人。睡眠薬ハイミナールでラリって，ダンモ（モダン・ジャズ）に踊り狂い，放縦なセックスにふける。このハイミナール（ハイチャン），ダンモ，フリー・セックスが当時フーテンの三種の神器といわれた。フーテンの祖型は1950年代アメリカのビートニクに求めることができるが，ビートニクやヒッピーほど明確な思想を持つことも反体制的運動に結集することもなく，ただ一過性の現象，風俗で終わった」（『増補新版　戦後史大事典』三省堂，2005）。

重要なポイントを押さえ，かつ要領よくまとめた素晴らしい解説と言えよう。いわゆる事典的な解説としてはこれで十分であるが，本稿では改めて当時の新聞や週刊誌記事にあたってもう少し詳しく検討していきたい[4]。

フーテン族の誕生

「族」はメディアによって「族」となる。これまで検討してきたすべての「族」同様，フーテン族もまたメディアによって取り上げられることによって「族」となった。マスコミのフーテン族への注目は，当時の新聞記事によって，テレビというメディアが先行したことがうかがわれる。『朝日新聞』の「波」というコラムが，1967年7月から8月にかけて，相次いでフーテン族を取り上げたテレビ番組にふれている。

まず，「さばかれた“フーテン族”」というタイトルで，7月18日放映のTBSテレビ「おはようにっぽん」のティーチイン「若者はダメか」を紹介している（7月20日）。スタジオ出演のフーテン族の男女に対し評論家や女優・歌手にコメントをさせ，30人の視聴者代表に判定させたところ，「ダメ派」10名，「ダメじゃない派」20名だったことを伝えている。

「“フーテン”ラッシュ」と題された，8月22日の回では，20日の日曜日には，「新宿フーテン族」（TBS），「無着先生フーテン族を語る」（東京12チャンネル），「スター千一夜」（フーテン娘と大島渚監督出演）[5]とフーテン関連の番組が3本も放送されたことを取り上げている。

これらの番組で披露された彼ら（フーテン）の言い分に共通していること

は，「仕事ぎらい」「フリー・セックス」であり，「ベトナム戦争に興味なし」「左翼は，嫌い」などが特徴であることを紹介している。その上で，日本のフーテンには，アメリカのビート族の物質文明への反抗やヒッピー族の徴兵拒否という背骨がないことを指摘し，「彼らはしょせん今日的繁栄の『残飯』による『自由』でしかない」と結んでいる。

さらに，「目標喪失の“フーテン番組”」（8月30日）では，フーテン娘など数人の十代の女性を集め「自分自身の広告」をやらせていた「マスコミQ」（TBS，8月28日放送）を取り上げている。この番組の司会者の「マスコミがフーテンを取り上げすぎるのには抵抗を感じる」というコメントに対し，この番組自体がフーテンを物見高げに珍しがっているのではないかと書き，「近頃のテレビはフーテンばやりで，ほかにやることがないみたいだ。テレビ自体が目標を喪失してフーテン化しているのではあるまいか」と批判している。

これらの一連の新聞記事からは，フーテン族にはテレビがいち早く飛びつき，盛んに報じたため，“フーテン族”なる流行が生まれた（作られた）という実態の一端がうかがわれる。マスコミが「流行っている」と伝えたものが，実際に「流行する」という，おなじみの「自己成就予言」のメカニズムである。

当初はテレビ報道に批判的だった活字メディアもすぐに後追いすることになる。新聞はもとより週刊誌・雑誌メディアは，盛んにフーテン族を取り上げるのだが，その扱いは決して好意的なものではない。とりわけ週刊誌記事にはそれが顕著だが，彼らに与えたレッテル（呼び方・形容自体）にそれは端的に表れている。

「狂える若者“フーテン族”」「町のゴミ同様の俗物の群れ」「ナマケ者で，ニセモノの多い輩の群れ」「フーテン乞食」── これらはいずれもある週刊誌の一つの記事の中に見られる表現である（「狂える若者“フーテン乞食”の行方」『週刊大衆』1967年9月21日）。

他の週刊誌記事も負けていはいない。──「コジキの遠足」「青春の日々をコジキ姿に身をやつし」「女に寄生して，かろうじて生き長らえている糞ひり虫」「性衝動はイヌ・ネコ同然」「ウジ虫の湧くようにどこからともなく集まってきた」「宿なしコジキ」（「女に寄生する“青春コジキ”の24時」『アサヒ芸能』1967年9月17日号）。

「若いモダンこじき」「なまけ者」「資本主義の無害な寄生虫」「残飯に群が

る豚の群れ」(夏堀正元「本格派フーテン族いでよ！」『週刊読売』1967年9月15日)。散々な言われようである。それまでも，さまざまな「族」が世間の顰蹙を買い，大人たちから冷ややかな視線を浴びせられてきたが，ここまで罵詈雑言を浴びせられたケースも珍しいのではないか。それは，フーテンという存在が，何よりも基本的に勤勉を尊び「働かざる者食うべからず」の倫理を共有してきた平均的日本人の感覚を逆なでするものだったからだろう。

流行としてのフーテン族

上記の新聞記事が示すように，フーテン族がマスコミに取り上げられて広く知られるようになったのは，1967（昭和42）年の夏頃だということは間違いない。ところが，同年秋にはすでに「フーテン族にも秋風　新宿駅前から追い立てられる」(『毎日新聞』1967年9月1日）という記事が見られる。それによると，“この夏突然変異的に発生，テレビに映画に大きな話題をまいた若者たち”が新宿駅周辺にたむろしていたが，たまりかねた同駅がフーテン締め出しの断を下し，9月1日午前10時から，同駅鉄道公安官を動員，淀橋署の応援を得て，東口前芝生に立ち入り禁止の立て札を10本打ち込んだという。

この朝も雑踏をよそに約30人の若者たちが芝生に寝転んでいて，女性4人を含む16人（16歳～19歳）が補導された。この記事では，“この種の若者たち”（フーテン族）は「ざっと500人」と記録している。

しかし，フーテン族がこの秋で完全に姿を消したわけではない。約一年後に同じようなタイトルの記事が見られる。――「質も落ち“秋風立つ”“フーテン論理”に背いて」(『毎日新聞』1968年8月17日)。冬の寒い時期にいったん姿を隠していたフーテン族は，冬眠から覚めた動物たちのように，春先にはまた姿を現したのである。朝日新聞のコラム「こんてな」には，“春風と共にフーテン族がふたたびメッカ・新宿をのし歩き始めた”とある（『朝日新聞』1968年3月7日)。

そして上記『毎日新聞』の記事は，「立ち入り禁止」の掲示があるにもかかわらず，無残にハゲた芝生の上で，薄汚れたジーパンにゴムぞうりの若者が，3，40人，とろんとした目付きで，ビニール袋のシンナーをかいだり，男同士で抱き合ったり……と，1968年夏の時点でのグリーンハウスの状況を伝えている。

しかし，この頃になると一般の人々の反応は冷ややかなものとなっていた。駅前を通る人たちはもうそんな若者たちに好奇の目を向けたりしない。「まだいるのか。しつこいなあ」とでも言いたげな流し目をくれて，そそくさと通り過ぎるだけであったという。

また，この記事では“テレビも来ない，週刊誌の取材も少なくなって，出演料や謝礼がもらえない”というフーテンの嘆きの声やほろ酔いのサラリーマンのおじさんのカンパもなくなったという愚痴も紹介されている。地元での商店街からも“フーテン締め出し運動”も起こり，フーテンに対する逆風が強まったことにもふれている。

この時点では，フーテンに対するマスコミの注目も一般の関心もだいぶ薄らいできたことがうかがわれる。さらに，1971年頃になると「フーテン族」の中身も微妙に変わってきたようである。フーテン対象の取り締まりでは，補導される中学生や高校生などの未成年者が増加し，フーテンが，家出少年や少女，学校生活から脱落した少年少女の非行形態の一つに変わってきたことを伝える新聞記事が見られる。同じフーテンと言う言葉で呼ばれながら，当初のフーテン族とは，いささか異なった集団になりつつあったということである（「新宿　フーテンは変わった　チビっ子急増　悪を求めさまよう」『毎日新聞』1971年8月10日）。

しかし，まだフーテン族自体は消滅には至らなかったようだ。それはもう少し先のことになる。彼らを新宿から追いやった最大の要因は，新宿という街自体の変容にあった。いわゆる「新宿副都心計画」の進展である。もちろん，この計画自体は新宿駅西口を中心としたプロジェクトであるが，新宿の街全体に影響を及ぼさずにはいかなかった。

「新宿　脱ヤング旋風　値上げで締め出し　ビジネス副都心への変身図る」（『読売新聞』1972年10月11日）という記事では，経済的な面から新宿が若者にとって居づらい街に変わったことが紹介されている。まず，新宿の喫茶店で，物価異変が起こった。

伊勢丹では，一杯350円，450円という「デラックスなコーヒー」が登場した。フーテンのたまり場として名をはせた風月堂新宿店でも，70円のモーニングコーヒーが90円に，120円のレギュラーコーヒーが150円に値上げされたという。

衣料品店もターゲットをティーンエイジャーから，20，30代にターゲットをシフトし，デパートもファミリー層やヤング・エリートの顧客を対象に

する戦略に転じた。

また，新宿署は，新宿駅東口で「フーテン追放作戦」を展開した。新宿から若者がじわじわと締め出され，新宿は若者の街からビジネスマンの街へと変わっていったのである。この過程で，フーテンは絶滅へと向かったものと思われる。

以上のように新聞記事をチェックしてくると，フーテンは発生から消滅まで，実に約5年以上の期間を跡づけることが出来る。これは，それまでの「六本木族」「みゆき族」「原宿族」などと比べて，「街族」の寿命としては相対的に長い方だと言ってよい。

「街族」としてのフーテン（族）

前稿で取り上げた，六本木族，みゆき族，原宿族が，それぞれ「六本木」「銀座」「原宿」という東京のある特定の場所を拠点としていたように，フーテン族も「新宿」を拠点とした「街族」の一つとしてとらえることもできる。

馬渕（1989）は，「若者たちが選ぶステージ＝街にはかならずどこかしらに異文化の光彩が認められた」（163頁）と言っているが，新宿の場合のそれは何だろうか。馬渕はそれをずばり「ロシア文化」だと指摘する。明治以来日本の主流となってきた欧米文化ではなく，その対抗文化とみなされる「ロシア文化」こそが，新宿という街の色合いを決定づけている。ロシア民謡を基調とする「歌声喫茶」や「ロシア風酒場」がその具体的な表れだというのである（同）。

かといって，新宿に欧米文化の香りが全く欠落しているというわけではない。ただ，新宿の場合メジャーなそれではなくマイノリティーの周縁的なものがもてはやされた。アメリカ文化で言ったら「モダンジャズ」とか「ビート族」，フランス文化で言えばその「ビート族」と共振していたサルトルの「実存主義」というように。そして，結論は次のようになる。――東京一番の盛り場としての銀座を脅かさんばかりに勢いを増しつつあった当時の新宿はたとえて言うなら「『闇の光』ともいうべき光彩を放ってその存在を主張し続けていた」（馬渕，1989，164頁）。

もっと端的に，新宿という街の特性を「二流の盛り場」とするとらえ方もある。銀座を「一流の盛り場」とするなら，新宿はまさに「二流の盛り場」であるというのだ。60年代の新宿は「二流の盛り場」だったがゆえに特別

のエネルギーを発揮し得たのであり，雑多な若者文化の拠点になりえたのである（宮沢，2014，39-41 頁）。

実際，60 年代の新宿は，複数の「族」の街であった。六本木にたむろした若者が「六本木族」，原宿に集まってきた若者が「原宿族」だとしたら，新宿に集まってきた若者たちは「新宿族」でいいのではないかと思うかもしれない。ところが，1960 年代後半から末にかけて新宿という場所を拠点として展開した若者集団や若者文化は，従来の「街族」の図式ではとらえられなかった。

当時の新宿という街には，大小さまざまな若者の群＝フーテン（族），ヒッピー（族），アングラ族，サイケ族，全共闘，政治少年などの雑多な若者集団が集結していた。あるいは，一人の若者が複数の「族」＝若者集団に所属していたとも言える。一人でいくつかの族を兼ねていたという場合もあった（馬渕，1989，164 頁）。

つまり，「……政治的であれ，文化的であれ，風俗的であれ，あらゆる先鋭的なものが呑み込まれ，閃光を放ち，渦巻いている，60 年代の新宿はそんな盛り場だった」（吉見，2008，278 頁）のである。いずれにしても，「新宿族」とひと括りにはできなかったのである。

フーテン族の種類

改めて，フーテンの実態と特性についてふれておこう。一口にフーテン族と言っても，細かく見て行くといくつかの異なったタイプが存在したようだ。自らも小さな違いで互いに差別化を図るのが「族」の特徴であることは，今までに何度も繰り返してきた。フーテン族の場合もその例にもれない。

例えば，フーテン族を①享楽派，②通勤派，③観光派，④本格派の 4 つに分類して紹介しているものがある（「東京メモ　ミニ・ハイド氏　フーテンの昼と夜」『読売新聞』1968 年 6 月 24 日）。

①享楽派というのは，長髪で原色の衣装という外見を整え，「なにかおもしろいこと」を探しに来る高校生や大学生。②通勤派は，昼間は勤めを持ち，夜になると着替えて出かけてくる。地方出身の中卒で，中小企業の従業員が多い。③観光派は，マスコミから情報を得て近郊や地方から都会に出てくる。④本格派は，文字通り本物のフーテンで，彼らは外見がとにかく汚いので，一目瞭然だという。

この記事では，もっとも多いのが②の通勤派だと書いている。彼らに共通しているのは日常の生活に強い欲求不満を持っていることだ。積極的に欲求不満を解消する術を知らず，気ままな夜のフーテンに変身して一時的に自分を取り戻す。

その意味で，昼間は満たされないながらも小心なジキルを装う，いわば「ミニ・ハイド」だというわけである。

フーテンの三種の神器

ハイミナール（ハイチャン），ダンモ（モダン・ジャズ），フリー・セックスをフーテンの三種の神器という。もう一つの説として，彼らの三種の神器を「セックス，ゴーゴー，ドラッグ」とするものもある（アクロス編集室編，1995，117頁）。

しかし，このうちゴーゴーに関しては，邪道だとする見方もある。ある週刊誌のルポ記事では，「ゴーゴーなんか踊っているヤツは，フーテンじゃねえょ。ありゃバカだ。フーテンならモダンジャズを聴いてほしいね」というフーテンのリーダー格の男の声が紹介されている（「新宿フーテン族の東大生　深夜の乞食生活に陶酔する若き男女の生態」『週刊文春』1967年8月14日号）。我こそが「本物」だと主張し，他の類似の集団をバカにするのは，「族」の特性のひとつである。

それはともかく，フーテンといったら，睡眠薬に代表される薬物，フリー・セックスはつきもので，これに音楽または踊りが加わるということである。睡眠薬で一番ポピュラーなのが「ハイミナール」で，その代用として「アトラキシン」（鎮静剤），「ドロラン」（鎮痛剤）などが使われ，それも手に入らない時は目薬が使われたという。もちろん，ドラッグというとその後の言葉の用法では，マリファナの方がしっくりくるが，マリファナは入手が難しいため一般には睡眠薬が使われたようだ（「若者たち最新版　“フーテン”するってどんなこと？」『女性自身』1967年8月21日号）

この薬物にまつわる独特の表現として，「ラリる」という言葉がある。一般的な辞書的な説明では，「睡眠薬・シンナーや麻薬などで酔ったようなふらふらの状態になること」（米川明彦編『集団語辞典』東京堂出版，2000，784頁）とされる。

これを当時の新聞記事は，さらにその正確な語源にまでさかのぼって，次

のように解説する。――「睡眠薬を飲んでラリルレロの発音ができない状態に陥る。これをラリる，またはラリったという」(「こじきの系列」(「サイドライト」『読売新聞』1967年8月8日)。「ラリる」という表現は俗語としてはかなり定着した言葉だが，この語源まで知る人は少ない。

フリー・セックスに関しては，“女の子はみんなの共有物” などと豪語する男もいるが，フーテンの多数派は男女とも実はフリー・セックスには否定的だったようだ。「だれだっていいなんてこと，いえないわ。やっぱりある程度は好きじゃなきゃダメよ。……」(女，19歳)，「フリー・セックスなんて日本でできっこないよ。……」(男，21歳) という声が紹介されているが(前出『週刊文春』記事)，おそらくこれが実態だったと思われる。

いずれにしても，「○○の三種の神器」という表現はマスコミが好んで使う常套句だ。“モダンジャズと睡眠薬とセックスに陶酔する若き乞食たち” のようなステレオタイプ化された伝え方もマスコミがよく使う手法で，読者の側もそうしたパターン化した物言いを好むところがある。

フーテンとヒッピー

ヒッピーとフーテンの違いについて，ずばり「汚い方をフーテンと呼ぶ」という記述もある (馬渕，1989，170頁)。異装異形は，街族に共通する特性だが，フーテン族の場合のそれは際立っていた。すでに紹介してきたように，彼らのいでたちに関する描写はほぼ共通している。――ぼうぼうに伸びた長髪，汚れ放題のシャツにジーンズ，裸足にゴム草履やサンダルをはいていた。そのため，「新宿こじき」「街頭こじき」などとも呼ばれた。外見に関する限り，いわゆるホームレス (路上生活者) のようだったといった方が，現在ではたとえとしてはわかりやすいかもしれない。

これは両者の外見上のわかりやすい区別だが，もちろんこれは半ばジョークであり，もう少しまじめな分類をしなければならない。

ヒッピーは hippie あるいは hippy という原語があることからも明らかなように，元はアメリカの若者文化である。そのルーツは，1950年代の「ビート・ジェネレーション」(beat generation) にまでさかのぼることが出来る。彼らは，サンフランシスコを中心に登場した若者たちで，アメリカ文明から離脱し，質素で原始的な生活を送り，自然や禅を愛し，前衛芸術やジャズを好み，麻薬 (マリファナなど) と自由恋愛を容認していた (同，174-175頁)。

これが，日本に飛び火して1959（昭和34）年の「ビート族」の誕生となる。日本に入ってきたルートとしては，前衛芸術家がグリニッチ・ビレッジから持ち帰ったケースと放浪中のビートニク（beatnik）のたまり場となった新宿のジャズ喫茶から広がった二つのルートが考えられるという（同，175頁）。

「風月堂」をジャズ喫茶と呼ぶのがふさわしいかどうかはともかく，新宿風月堂が，外人ヒッチハイカーやヒッピーの一つの拠点となっていたことは確かなようだ。また，風月堂は「べ平連」の手引きで脱走した米兵たちの日本潜行の際の舞台ともなったことでも有名になった（「日本のアンチ社会派『フーゲツ族』ヒッピーの巣窟，新宿『風月堂』に集まる青年たち」『週刊漫画サンデー』1967年12月13日号），「日本の“グリニッチ・ビレッジ”風月堂の二十年」『増刊漫画サンデー』1968年11月15日号）。

ヒッピー・ムーブメントという言葉があるように，ヒッピーが目指すのは，本来は反文明や反物質主義，反競争主義などの実践運動である。しかし，このような意味で自覚的な対抗文化運動を展開した本来のヒッピーは，日本にはほとんど存在しなかったようである。

その数少ないヒッピー・ムーブメントの当事者（実践者）の，これまた貴重な実践記録である山田塊也『アイ・アム・ヒッピー　日本のヒッピー・ムーブメント　'60－'90』（第三書館，1990）には次のような記述がある。

> 日本では「部族」が1967年にコミューン運動を開始し，カウンター・カルチャーの花を咲かせた。「部族」は，新宿ビートニックと国分寺グループがドッキングしたもの。信州富士見高原に「雷赤烏族」，南諏訪之瀬島に「バンヤン・アシュラマ」，東京国分寺に「エメラルド色のそよ風族」の三拠点を構築し，新聞『部族』を発行して，わが国のヒッピー・ムーブメントの前衛的役割を果たした（39-39頁）。

彼らは，富士見高原では土地も入手し「自給自足的」な生活の実践も試みているのだが，この記述にあるように，「本物のヒッピー」は，1967年の時点ですでに新宿を離れているのである。

従って，1967年の夏にマスコミによってその存在が一気にクローズアップされた「フーテン」は，いわば「偽のヒッピー」「ヒッピーの亜流」「風俗化されたヒッピー」だったのである。

もちろん，日本においても，ムーブメントのレベルにまではいかないが，ファッションやライフスタイルの面で，“ヒッピー的なもの”を求めた広義の「ヒッピー」も一定数は存在したと思われる。

ヒッピー・ファッションは，長髪・ジーンズはフーテンと同じだが，“指輪は中南米，ベストはアフガニスタン，バンダナはインド，ブレスレッドはタイ，履き物はベトナムのホーチミンサンダル等々”というように第三世界の手作り品を愛好した。彼らはいわばそうした「おしゃれ」のこだわりを通して，「自覚的に（対抗文化的に）その反公害あるいは文明批評としてのファッション表現」を行ったのである（馬渕，1989，178-179 頁）。

また，反ベトナム戦争運動の中で掲げられた，「LOVE & PEACE」や「フラワーチルドレン」などのスローガンにも心情的共感を示した（同，179 頁）。

フーテンの逸脱行動

さまざまな「族」は，その逸脱行動によって世間の顰蹙を買ってきた。フーテンもまたその例外ではない。そして，逸脱行動には世間一般の常識から外れているという程度のものから犯罪に至るまで，さまざまなレベルのものがある。

目障りであったり周囲に不快感を与える程度のものに対しては，大人たちは眉をひそめはするものの，積極的に排除しようとはしない。こうしたものに対しては，若者の行動ゆえに黙認することも少なくない。

薄汚い恰好でグリーンベルトにただたむろしているだけのフーテン族は，まさにこのレベルのものであろう。それが，シンナー遊びをし始めると「非行」のレベルへシフトする。「非行」という言葉は，言うまでもなく特に青少年の社会規範に反した行為をさすのに使われる。

そして，万引き，恐喝，強盗となると，これは明らかに犯罪である。フーテンたちは，「カンパ」と称して通行人などに物や金銭をねだった。ほろ酔い気分の酔っぱらいなどは，面白がって彼らにタバコや金を渡した。物や金品を与える行為も，与える側が自主的にやる限りは犯罪にはならない。相手の意に反して物や金銭を巻き上げると，「ゆすり」「たかり」「恐喝」となる。

この時期の新聞記事には，フーテン族をめぐるこれらの行為に関したものが多く見られる。これらはいわばありふれた犯罪で，扱いも小さいベタ記事

となる。

そして，目立ち過ぎてしまった若者たちには，必ずそれにつけ込むより大きな悪が存在するのが常だ。フーテンもしばしば不良外人や暴力団の餌食となっていた。これらは，「事件」として当然扱いも大きくなる。

フーテン族の若者に睡眠薬を通常の10倍にもなる高値で売り付けていた密売人三人が逮捕されたという記事（「フーテン族を食いもの　睡眠薬暴利で密売」『読売新聞』1967年8月7日）を皮切りに，この種の記事が多く見られる。

「外人フーテン族逮捕　大麻密輸　女性含む三人組 新宿」（『朝日新聞』1968年1月16日），「外人フーテンまた逮捕 新宿で大麻持つ二人」（同，1968年1月24日），「マリファナ密輸“フーテン外人”ら10人」（同，1968年6月26日）など。

特に最後の記事では，新宿周辺でフーテン族にマリファナを売りつけていた不良外人グループ3人と仲介役の暴力団員を含む日本人7人が逮捕されたことが報じられている。不良外人と暴力団が合体した「犯罪組織」にとって，フーテン族が格好のターゲットであったことが分かる。

また，同じ餌食でも犯罪の片棒を担がされるという形をとるケースもある。暴力団員が，新宿にたむろするフーテンや家出少年を利用して，いわば組織的に万引きをさせていたというケースもある。万引きした商品を値引き販売までしていたというからたちが悪い（「フーテン集め万引き 暴力団員ら九人を送検」『読売新聞』1968年5月14日）。

フーテン族はまたしばしば「騒動」を起こしている。1967年9月10日午前2時頃，新宿東口で，フーテン族と酔っ払いとのいざこざがきっかけで，約200人の野次馬が集まった。両者入り乱れて，グリーン地帯に建てられた「立ち入り禁止」の立て札を引き抜き火をつけたり，投石したりした。

その後，群衆は約500人に膨れ上がり，淀橋警察署新宿東口派出所に投石などした。警視庁機動隊二個中隊が出動し，6人が逮捕されたが，騒ぎは明け方まで続いた（「フーテン族ら騒ぐ　新宿駅前」『朝日新聞』1967年9月11日）。

約一年後にも全く同じような「騒動」が起きている。1968年6月30日午前2時前，フーテン族に深夜営業の映画館やスナックから出てきた野次馬が加わった約300人の群衆が新宿駅東口広場に集まり，東口派出所に投石した。

警視庁機動隊が出動し，最終的に10人の逮捕者を出した（「逮捕者は10人に　新宿のフーテン族騒動」『朝日新聞』1968年7月1日）。

もちろん，フーテン族が放置されていたわけではない。それまでの「族」たちがそうであったように，フーテンもまた，その存在が目立つようになってからは，取り締まりの対象となってきた。

現に後者の「騒動」の直前には，大規模な一斉取り締まりが実施されていた。1968年6月17日から警視庁防犯部が，地元の淀橋・四谷警察署と協力し，「暴力等防止条例」「軽犯罪法」を適用し大がかりな“フーテン狩り”に乗り出すことになったという記事が見られる（「“暴走フーテン”一掃　警視庁きょうから取締まり」『朝日新聞』1968年6月17日）。

7，80人の私服警官も動員して，悪質なものはびしびし検挙するという意気込みが語られているが，この取り締まりの結果についての記事は見当たらない。直後に「騒動」が起きていることを考えると，その実効性は疑われる。

また，この記事ではこの時点での新宿のフーテンの数が，約300人とされている。①本格派フーテンが5，60人，②通勤フーテンが150〜160人，③“観光”フーテンが，約100人，ハイティーンと20代の男女が半々という内訳も紹介されている。

いずれにせよ，大小様々なレベルのフーテン族と取り締まり側との攻防は長期間にわたり繰り返され，先にのべたように1970年代初頭にフーテンの消滅をみるまで続いたということである[6]。

アングラ文化

フーテンやヒッピーと親和性の高い同時代の文化といえば，「アングラ文化」と総称されるものである。

「アングラ文化の教祖たち」というサブタイトルのついた『サンデー毎日』の記事が，当時のアングラ文化の概要と主要な担い手たちをジャンル別に簡潔にまとめている（「天下太平にショックをまこう　アングラ文化の教祖たち」『サンデー毎日』1968年3月24日号）。

まず，「映画」では金坂健二という名が上がっている。彼は，1966年に第1回アングラ映画フェスティバルを開催。アメリカのアングラ映画[7]や自作の「アメリカ・アメリカ・アメリカ」を上映した。1967年には第2回目を開催し，大林宣彦，足立正生，岡部道男等のアングラ映画作家を組織し「ア

ングラ・シネマ協会」設立を計画している。

彼は，二冊目の評論集『映画は崩壊するか』も出版し，大学の学園祭では引っ張りだこで，都内の主要大学はもちろん北は北海道大学，南は熊本大学まで遠征し，“アングラ教”を布教したという。大学の学園祭に呼ばれるということは，若者の支持を示すバロメーターであるので，当時は彼の人気が高かったことが分かる。

「アングラ演劇」の教祖として上げられているのが，「状況劇場」をひきいる唐十郎。新宿花園神社でテント小屋（赤テント）での芝居をする。客席はムシロの上だが，定員130人はいつも超満員。劇団員も風変わりな“アングラ的経歴”の持ち主ばかりで，唐の言によれば，「泣優」「恨優」「痴優」ということになる。「俳優というのは固定民族に対する遊行民族で，役者の原点はかわらコジキ・かわら者」だとする彼の持論が紹介されている。

他には，「天井桟敷」（寺山修司），「早稲田小劇場」（鈴木忠志）の名前が上がっているが，これに「黒テント」（演劇センター68/69）の佐藤信を加え「アングラ四天王」と呼ぶこともある。

「イラスト」というジャンルでは，横尾忠則が登場している。横尾忠則の描いたポスターは，ポスターの役割を果たさない。なぜなら，街頭はもちろん，喫茶店や集会場など屋内にはったものまで，一日ももたないうちにファンの手で持ち去られてしまうからだという。しかも，それが高値で売れると言うエピソードが紹介されている。

これだけで，人気のすごさを伝えるには十分である。「デザイナーでもないし，絵かきでもないという感じが，私をアングラと言わせるのでしょうね。……」というのが本人の言。

「ハプニング」というジャンルでは，加藤好弘という名が上がっている。「ハプニング」というのはこの時期特有の呼び方で，その後の一般的な呼び方で言えば，「パフォーマンス」のことである。突然，場所を選ばず奇妙な振る舞いを披露するのが，「ハプニング」である。

加藤は，1960年に前衛パフォーマンスアート集団「ゼロ次元（の会）」を結成，過激な全裸パフォーマンスで注目を浴びてきた。1967年には，新宿・紀伊国屋書店の地下アーケードを全裸で防毒マスクといういでたちで行進した。

以上が，「アングラ文化」の教祖と呼ばれた面々だが，この時期に「アングラ」と並んで使われた言葉が，「サイケ」である。「アングラ族」・「サイケ

族」などという呼び方もある。アングラ族の一部がサイケ族と呼ばれるグループだと言えるかもしれないが，いずれにせよ両者は重なっている部分が少なくない。現に，前出の横尾忠則の作品は，「サイケ調」と呼ばれた（「サイケ・バーで陶酔する男と女」『アサヒ芸能』1968年5月19日号）。

ちなみに，サイケとは，サイケデリック（psychedelic）の略語である。幻覚剤（LSD）を使用した際に生じる幻覚状態をいう。幻覚世界を表現した芸術が，サイケデリックアートである。極彩色のぐるぐる渦巻くイメージやペイズリー模様が代表的なものである。

また，アングラといえば，「アングラ・レコード」も忘れてはいけない。その筆頭は，何と言っても「帰ってきたヨッパライ」（松山猛・北山修作詞，加藤和彦作曲，ザ・フォーク・クルセダーズ歌）である。レコードは1967年12月発売されたが，関西で火がついたブームはたちまち全国に広がり，1968年オリコンの年間シングル売り上げ第2位になった。

ザ・フォーク・クルセダーズは京都の現役の大学生3人で，手作りの文字通りの自作自演にレコードだった。テープの早回しという意表を突く音づくりと人を食った歌詞のナンセンスさが受けたコミックソングである。

2匹目のどじょうを狙うレコード会社は，「ケメ子の歌」で続いた。これは，もともとは作者不詳の歌で，作曲家の浜口庫之助が見いだした曲で学生たちの間で愛唱されていたという。ザ・ジャイアンツの歌うビクター版とザ・ダーツの歌うコロムビア版との競作となった。内容は，たわいのない失恋ソングだが，キワモノ感はぬぐえない（「地上で旋風 “アングラ・レコード”」『読売新聞』1968年1月24日）。

この時期の音楽メディアといえば，「フォーク・ゲリラ」も忘れてはならない。1969年の春に「べ平連」の若者たちが，新宿西口地下広場で始めたささやかな歌によるデモンストレーションである。やがて，それは見物客や野次馬を集め巨大な集会へと膨れあがった。騒動を恐れた警察は，「広場」ではなく「通路」だと強弁し，「公共空間の占拠」に当たるとして排除に動いた。7月には，機動隊によって強制的に追放された。

これもこの時期の注目すべき若者現象だが，この事例は学生運動との関連でとらえるのがふさわしいので，ここではあえて詳しくは取り上げない。この「フォーク・ゲリラ」に関しては，大木晴子＋鈴木一誌編著『1969，新宿西口地下広場』（新宿書房，2014）という当事者による素晴らしい証言集と記録がある。

社会的・時代的背景

フーテンが注目された1960年代末とはどのような時代だったのかを簡単に振り返ってみよう。ひとことで言うとこの時代は，1950年代の半ば以降高度経済成長路線をひた走ってきた日本社会にひずみやゆがみが見え始めた時期だと言える。

東京オリンピック終了後は，その反動で一時的な不況を迎えたが，直ちにそれは克服され，1965（昭和40）年からは好景気に転じ，以後1970（昭和45）年まで続くいわゆる「いざなぎ景気」の時代に入っていく。1966（昭和41）年には3C（Car, Cooler, Color-TV）が流行語となり，「新三種の神器」の新しい耐久消費財に囲まれた豊かな生活が広がっていく。1964（昭和39）年に自由化された海外旅行を含め余暇も大型化・高級化していく。1960年代後半は，端的に「大型耐久消費財と大型レジャーの時代」と呼ぶことが出来る。

1968（昭和43）年にはGNP（国内総生産）が，資本主義世界で第2位となり，国民は「昭和元禄」の繁栄を謳歌していた。

ところが一方で，この時期には，あまりにも急激な高度経済成長の弊害として，公害問題・都市問題が噴出してきた。高度経済成長の功罪の罪の部分が露呈してきたのである。1966（昭和41）年には交通事故による死者が1万4千人近くに達し，「交通戦争」という言葉が流行語となった。

また，全国各地で噴出した公害問題を受けて，1967（昭和42）年には「公害基本法」が公布された。翌1968（昭和43）年には，「四大公害訴訟」（「イタイイタイ病」「水俣病」「新潟水俣病」「四日市ぜんそく」）と呼ばれた公害の被害を訴える訴訟が相次いだ。

1968（昭和43）年10月21日には，国際反戦デーで集結した反日共系全学連の学生たちが新宿駅構内に乱入し，いわゆる「新宿騒乱事件」が起きた。1969（昭和44）年1月には，学生運動の最大の拠点であった東大安田講堂が，大規模な機動隊の導入によって陥落する。学生運動は，これを契機にピークから衰退に向かって行くことになるが，1960年代末はよい意味でも悪い意味でも奇妙なエネルギーが横溢し，騒然とした時代であったことは間違いない。

フーテンの評価

当時の『朝日新聞』に，「論争　フーテン族」という特集記事がある（1967年8月3日）。フーテンに肯定的な立場から映画監督の大島渚が，否定派の代表として明星学園教諭の無着成恭がコメントを寄せている。

大島は言う――フーテンが生まれた理由は，日本の高度成長の結果余剰な金が生じたことである。ヒッピーがアメリカの繁栄が生み出した「鬼っ子」であるように，日本のフーテンも日本社会の繁栄の「鬼っ子」である。

いつの時代いつの社会にもそれにふさわしい青春の反逆のかたちというものがあった。1960年以降の日本経済の成長が青春の反逆のかたちを変えてしまった。それまでは，若者は社会に激しく正面からぶつかっていったが，彼らは「静かにフーテンする」のだ――と言う。

繁栄した現代社会に働く巨大な政治や経済のメカニズムの前に，人間は卑小な部分品にすぎない。フーテンたちはそのことを本能的に知っている。彼らは「メカニズムに組み入れられることを拒否して自分自身が一個全体としての人間ならんとしている」というのが結論である。

一方，無着の見解は次のようなものである。――「六本木族」「みゆき族」「原宿族」などのいままでの「族」は，一般的には恥ずかしい行動も醜い姿も，「カッコイイ」と思い込んでいる気の毒な人たちだ。この赤ん坊のような判断力のない自己中心主義のこどもたちは，ある場所から追放しても，またどこかへ行って「なんとか族」になるだけだ。

車やセックスやジャズに夢中になっている時の充実した感覚だけが人生なのだと主張して譲らない彼らは，「もはや人間ではない。虫けらであり，ゲジゲジだ」と，言葉は激しい。

そして，話は突如自民党政権の教育政策批判に飛躍する。こんな若者たちを生んだのも日本の教育のせいだというわけである。教科を科学的に分析し体系的に順序正しく教えれば，「人間の労働と人間の社会を愛する真に人間らしい人間」が生まれるはずだと主張する。

ところが，従来の誤った教育を受けてきた若者たちの本質は，保守的で反動的ですらある。彼らの行動は，真に青年らしい行動的なものとなっていない。前世代との断絶を強調するためには，自分の中にある前世代的なものと激しく戦う「自己否定」があるべきだと結論づける。

フーテンが，現代社会が生み出した特有の若者のあり方であるという点では，両者の見解は一致している。それを肯定的にとらえるか否定的にとらえるかの違いである。

また，『毎日新聞』の「憂楽帳」というコラムでは，「ゲバとフーテン」と題して，「ゲバ学生」と「フーテン」を論じている（1969年11月22日）。そこでの主張は次のようなものである。

この両者は，一見正反対の存在のように見えるが，案外共通点があるのではないか。いずれも機械化・マンネリ化・画一化された現代社会に対する「社会的欲求不満」の表れではないか。「とにかく殻を突き破りたい，自分というものの個性をあからさまに発揮し，その人間的存在意義を自分の目で確かめてみたい――こういった衝動に駆られているのではないか」というのが中心的な論点である。

方向性こそ違え，「ゲバ学生」と「フーテン」には，相通じる「心理基盤」があるのではないかという見解で，二つの若者集団に共通の「心理」を見いだしている。フーテンのとらえ方としては興味深いもので，筆者の見方もこれに近い。

おわりに

それでは，改めてフーテン・ヒッピーとは何だったのか？　彼らが，1960年代に成立した高度成長期の終盤の日本社会を基礎にした「豊かさの病理」の表れの一つであり，「飽食の時代」の産物であることは間違いない。

そうかと言って，フーテンやヒッピーをただの怠惰な若者たち，怠け者の集団であり，一時的な若者風俗レベルの流行現象にすぎないと言ってしまったら，あまりにも否定的な評価となる。

彼らの行動もまた，学生運動とはベクトルの向きは違うものの，青春の反抗の一つの形態であったことも事実だろう。たとえ自覚的なものではなかったにせよ，社会の現状に対するいわば本能的な拒否反応，無意識の抵抗だったかもしれないのである。

競争主義の社会に背を向け，体制（大勢）から敢えて「降りる」こと（ドロップアウト！）は，ひとつの立派な「思想」である。コミューンのような本格的な運動にまでは至らなかった「疑似ヒッピー」も，来るべき減速経済・低成長時代のライフスタイルを先取りしていたのかもしれない。彼らの「思

想」は，「自然回帰」や「エコロジー重視」の先駆けだったとも言える。

一方，ヒッピー文化としてのアングラ文化が残したものは，確実で大きい。当時は珍奇なものとしてキワモノ扱いだったが，それらはその後大きく花を開かせ，「アングラ文化の旗手」と呼ばれた人たちの中には，それぞれのジャンルで優れた業績をあげ，今では「大御所」と言われるような人も少なくない。

そのことに対しては，マイナーな文化がメジャーに取り込まれてしまったのだという否定的なとらえ方もある。しかし，それぞれのジャンルでその時期に生み出されたものが，その後の大衆文化やポピュラーカルチャーの基礎を築いたことは事実である。それらは，大衆文化やポピュラーカルチャーの領域で実り豊かな成果を残し，今では貴重な「遺産」とも言えるようなものになっている。

ただ，ここで問題になることがあるとすれば，その担い手についてである。この時代の「アングラ文化の旗手」と呼ばれた作り手たちの多くは，実は団塊の世代よりは10歳ほど年上の人たちだったということである。アングラ文化の作り手たちは，この時期の若者の中核的な部分を構成していた人間たちよりは，少し年長の人たちだった。

しかし，間違いなくそれらの受け手・支持者たちは圧倒的に団塊の世代だった。大衆文化・ポピュラーカルチャーとりわけサブカルチャーにとっては，熱心な享受者・消費者はその成立には欠かせない存在である。受け手もまた大衆文化の重要な担い手なのだ。その意味では，団塊の世代もアングラ文化に参入し，アングラ文化を「作った」のである。

1960年代末は，戦後の第一次ベビーブーム世代（「団塊の世代」）が，まさに若者世代の中核を構成するようになった時期である。そして，この巨大な“かたまり”の団塊の世代の中に集積されたエネルギーとパワーが，いたるところで爆発したのである。

従って，フーテン・ヒッピー，アングラ文化とは，この団塊の世代と当時勢いを増しつつあった新宿という街が交差するころに生まれたひとつの“化学反応”であり，“特異で奇妙な若者文化”だったと，ひとまずは結論づけることが出来る。

そのときに，団塊の世代の量的な大きさ（ヴォリューム！）は，無視できない要因だろう。過密状態におかれた動物たちは，パニックや異常行動を起

こすと言う。1960年代末の若者文化の大爆発は，そのような俗流生物学的解釈を想起させずにはおかない。

《注》

（1） 以下の記述では，「フーテン」と「フーテン族」および「ヒッピー」と「ヒッピー族」は，特に区別しなければならない場合を除いて，相互互換的に使う。

（2） フーテンという言葉の由来については，次のような説もある。──「日雇い港湾労働者を風太郎（フータロー）と読んでいて，これがのちにプータローにかわるが，このフータローがフーテンにかわったとも考えられる」（馬渕，1989，174頁）。

（3） 「鍵」（市川崑監督，1959年，大映），「瘋癲老人日記」（木村恵吾監督，1962年，大映）など。

（4） フーテンの数については，新聞や週刊誌の記事では，多くて500人とするものが一般的だ。800人というのはいささか過大すぎる数字ではないか。

（5） 大島渚監督はスカウトしたフーテン娘・桜井啓子を主演で「無理心中　日本の夏」（1967年，松竹）という映画を作っている。

（6） フーテンが起こした騒動には奇妙なものもあった。この時期の学生運動で最も注目を集めた東京大学とフーテンとの間に思わぬ接点が生じた出来事である。1968（昭和43）年8月24日の夜，安田講堂前広場に新宿のフーテン族約50人が集まり，広場横にある浜尾新元東大総長の銅像に白ラッカー（ペンキ）を吹きかけ，金のこぎりで首の部分を切ろうとしたという事件である（「浜尾総長に像に乱暴　フーテン族，東大で集会」『朝日新聞』1968年8月25日）。

（7） アングラとは，言うまでもなくunderground の略。アングラ映画とは，商業主義のペースで作られることを拒否して個人が作る自主製作映画のこと。

引用及び参考文献

アクロス編集室編（1995）『ストリートファッション　若者スタイルの50年史』PARCO

石川弘義ほか編（1991）『大衆文化事典』弘文堂

市川孝一（1995）『生活意識の変容　日本人の戦後50年』（『現代のエスプリ』341号）至文堂

市川孝一（2012）「戦後若者文化の一断面 ──『アプレ犯罪』を中心にして ──」『文芸研究』第116号（明治大学文学部紀要）

市川孝一（2013）「高度成長期の若者文化 ──『太陽の季節』と太陽族ブーム」『文芸研究』第119号（明治大学文学部紀要）

市川孝一（2014）「『街族』を検証する ──『六本木族』『みゆき族』『原宿族』──」『文芸研究』第122号（明治大学文学部紀要）

北中正和（2003）『増補　にほんのうた　戦後歌謡曲史』平凡社

佐々木毅・鶴見俊輔ほか編（2005）『増補新版　戦後大事典』三省堂

世相風俗観察会編（2009）『増補新版　現代世相風俗史年表　1945～2008』河出書

房新社
難波功士（2007）『族の系譜学　ユース・サブカルチャーの戦後史』青弓社
馬渕公介（1989）『「族」たちの戦後史』三省堂
宮沢章夫（2014）『NHK ニッポン戦後サブカルチャー史』NHK 出版
山田塊也（1990）『アイ・アム・ヒッピー　日本のヒッピー・ムーブメント　'60－'90』第三書館
吉見俊哉（2008）『都市のドラマトゥルギー』河出書房新社
読売新聞編集局［戦後史班］（1995）『戦後 50 年にっぽんの軌跡』読売新聞社
読売新聞昭和時代プロジェクト（2014）『昭和時代　戦後転換期』読売新聞社